



Title	「教育をとらえる視座-人権感覚をみかく」-カリキュラム改善の取り組み-その1-
Author(s)	高野, 和子
Citation	明治大学教職課程年報, 20: 75-77
URL	http://hdl.handle.net/10291/8074
Rights	
Issue Date	1998-03-20
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

「教育をとらえる視座—人権感覚をみがく」

—カリキュラム改善の取り組み—その1—

高野和子

『教職課程年報』第19号で「教職カリキュラム改革のヴィジョンとプラン」(齋藤 孝)が報告されたが、そこで紹介されていた具体的試みの一つとして、97年度後期に、「教育をとらえる視座—人権感覚をみがく」と題した授業を行った。教職・社会教育主事課程の専任教員全員が回り持ちで授業を担当するという初めての形式であったが、既存の科目編成には手を加えず、「教育社会学」の枠を使っただけの試みとした。

前期に教育原理を履修した1年生を主対象に、「教育と人権」を全体テーマとする総合科目的な授業を設定することで、大学教育の早い段階に、自分と教育との向き合い方を考え、人権に関するセンシビリティをつける手がかりをつかんでほしいと考えた。個別の教職科目に分化する以前の、いわば、人の育ちに関わる仕事を志す人のための一般教養的なものとして、「人権」を緩やかな共通テーマにしながら、個々の教員がもっている“これはぜひ伝えたい、考えてほしい”という問題を提示していくというやり方である。したがって、教育と人権に関わる問題を網羅的に取り上げるという構成にはなっていない。

授業は、担当教員が自分で話す場合もあれば、ゲスト講師を招くものもあった。時間割表上の責任者である高野が毎回はじめにその時間の簡単な紹介はするが、学生にとっては、毎週違う人間が教壇に現れるという授業である。履修登録学生数は172名。

■授業日程記録 (1997年度後期 和泉校舎(金)5限)

[]内は担当者、太字はゲスト講師

9/26 [高野]	導入
①10/ 3 [高野]	子どもが創る児童館
	鈴木雄司(杉並区立高円寺南児童館館長)
	浅野 純(都立高校生)
	島田紗良、高木 渚(区立中学生)

- | | |
|--------------|---|
| ②10/17 [別府] | 個人にとっての教育・社会にとっての教育
—自己実現のための人権— |
| ③10/24 [齋藤] | 環境問題と市民意識の形成
宮川知之 (木風舎) |
| ④11/ 7 [村岡] | 学校と文化 |
| ⑤11/14 [高野] | 人権・階層・教育—シカゴの事例から考える— |
| ⑥11/21 [古屋野] | 情報化社会における教育と人権
—“情報革命”と障害者の自立—
吉沢千恵 (The Magical Toy Box) |
| ⑦12/ 5 [小林] | 識字と人権 |
| ⑧12/12 [北田] | 相川日出男と子どもたちの1年
—人らしさを育てるということ— |
| ⑨12/19 [三上] | 男女平等をめぐる歴史と現状—その常識・非常識を問う— |
| ⑩ 1/ 9 [古屋野] | 地震と社会—「阪神大震災」記—
外岡秀俊 (朝日新聞) |
| ⑪ 1/16 [竹松] | 教育における子どもの人権—臨床心理士の視点から—
桑村かすみ (国立教育会館) |
| 1/23 [高野] | レポート回収 |

■成績評価の方法

成績評価はレポートによって行った。学生たちは、①～⑪の授業のなかからふたつ（授業A・Bとする）を選んで、それに関連するテーマで書くことと、講座全体から自分がなにを得たかについて書くこと—つまり、1) 授業Aに関わるレポート、2) 授業Bに関わるレポート（各400字*5枚以上）、3) 講座全体から得たもの（400字*3枚以上）の3つのレポートを書くことを求められた。1)、2)のレポートはそれぞれの回の担当教員が読んで評価し、それを3)を読んだ高野が総合して最終評価を行った。

■授業に対する反応など—成績評価を終えて

レポートの中の表現を引用しながら授業に対する学生たちの反応をスケッチしてみたい。

全体的な印象は、特に3)のレポートについて、学生たちがこちらが思っていた以上に真剣にものを考えているということである（学生たちに対して失礼千万な言い方ではあるが）。「僕がこの講座全体から得たものは、自分で考えるということの確認です。…考え続けることに対するポジティブな感覚も得させてくれました」（経営2，男；数字は学年）。

学校教育の枠を越えた問題が取り上げられ、教育と関係なさそうな人も含めた多彩な人々が

語り手として登場することで、「[教育]の形の多様性」(文2, 女),「価値観の多様性を個別具体的に目の当たりにすることができ」(法2, 男), そのことによって「僕の中の人権という言葉のリアリティー」(文2, 男)がつかめたといった感想がまず多かった。識字の話聞いて夜間中学へ行行った学生, 児童館をたずねた学生たちもあり, 教室の中から学生たちを引っ張り出すインパクトのある出会いであったことがわかる。

これらは, 同時に, 「自分なりに問題意識を高められた分, 逆に, 不安になってくるところがある」(文1, 男)という状況をももたらす。“この問題に対処するにはこうしなさい”という提示のしかたがされた授業が結果的に1回もなかったこともあり, 「教育は正解を教えてくれるものではないらしい。…自分で考えなさいということだ。教育に答えを求めては, ダメだ」(文1, 男)と思わされたようだ。

各回の授業は, ゴミを持ち込んで学生たちに分別させたり (③), 実験をやったり (④), 学生たちの朗読があったり (⑧), ビデオ・教材提示装置などの視聴覚機器を使用したりと, 多様な授業方法となった。「それぞれの先生がさまざまな授業の進め方をしておられ, 授業の展開の方法にはいろいろあるのだと身をもって体験でき, 勉強になった。また, 教育の一つの形として, 授業がもっている影響力・効果・可能性について考えることができた。」(文1, 女), 「講義を受けながら, いつも講師や, その用意した教材, 器具, プリント, さらにそれを用いるタイミング, 話し方を見てきた」(文1, 男)というように, 事前に授業のねらいとしては想定していなかったが, 結果的に, 比較しながらいろいろ教育方法を学ぶ機会となったようである。

ひとつ気になったのは, 受講生たちのおとなしさ, 素直さである。何人ものゲストの方がおっしゃったが, 授業中もとても静かによく話を聞いてくれる。レポートを読めば理解が深いこともわかる。しかし, 110人が提出した3種類のレポート, 総数330の中で, 授業への疑問・批判・反論を述べたものは片手に満たない。私たちの問題提起のしかたがやはり“教え込み”になっているのか, という点まで含めて, 学生たちのこの学びの姿勢を検討することが必要である。